和歌山大学におけるジオパーク教育と地域学の実践報告
―和歌山大学南紀熊野サテライトでの教育活動を通した社会貢献―

Practical report on geopark education and regional studies at Wakayama University
—Social Contribution Through Educational Activities at Wakayama University Nanki Kumano Satellite—

古久保 綾子[1]
[1]和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 南紀熊野サテライト

和歌山大学南紀熊野サテライトにおいて，社会人，大学生，高校生等を対象に実施したジオパーク教育の視点を取り入れた地域学「紀州郷土学」（2013～2017年８科目，県西牟婁地域），「熊野郷土学」（2017～2021年８科目，東牟婁地域）計16科目８年間の教養科目（2020年度より連携展開科目）の実施事例を報告する。

キーワード：ジオパーク，ジオツーリズム，地域学，社会貢献，リカレント教育

1．緒言

大学は，歴史的に教育・研究を使命としてきたが，社会情勢の変化とともに期待される役割も変化しており，教育・研究に加えて「社会貢献」（地域社会・経済社会・国際社会等，社会全体の発展への寄与）を大学の「第三の使命」としている。

本来，大学による人材養成や学術研究は，それ自体が，国の発展に対する長期的観点からの社会貢献であるが，近年は，公開講座や産学官連携等を通じたより直接的な貢献が求められている[1]。

さらに，2013年度の「地（知）の拠点整備事業」，2020年度「大学よる地方創生人材教育プログラム（COC＋R）」が選定校で実施されるなど，「社会貢献」に加えて「地域の知の拠点」として，大学が持つ教育・研究・社会貢献の機能を，地方創生や実践的な人材養成に活用することが期待されている。

和歌山大学が所在している紀伊半島では，豊かな自然，歴史，文化を活用した観光振興策が，数多く取り組まれている。

一方では，諸課題も多く，18歳人口の県外流出，高齢化による人口減少や過疎化，産業の担い手不足，疲弊する地域の経済，自然災害への対策と課題も幅広い。南紀熊野地域は，様々な地域振興策に併せて，多分野の人材養成が必要な地域である。

このような状況のもと，大学の使命である社会貢献では，地域にどのような貢献が可能なのであろうか。

本稿では，和歌山大学が，県域の紀南地域に設置している地域拠点である「南紀熊野サテライト」[2]（2005設置）を活用して地域住民を対象に高等教育を提供している例として，ジオパーク教育や地域学の実施を報告し，大学が地域拠点を活用して提供する高等教育や公開講座，産学官連携等を通じた直接的な貢献で見込まれる，多様な主体者形成，学校教育との接続での将来世代への貢献，社会人受講者による経済活動からの地域振興の可能性など，地域にどのような社会貢献が可能かを考察する。

2．先行事例，先行研究の状況

本稿で扱う「ジオパーク教育」とは，主にジオパーク認定地で取り組まれることが多く，学校教育，社会教育，生涯学習と幅広い世代や分野で取り組まれる教育活動である。地域の防災教育や環境教育として実施されることも多いが，近年では，ジオパーク教育は，ユネスコや文部科学省が重視するESD[3]（Education for sustainable development持続可能な開発のための教育）と親和性が高いと捉えられている。竹之内（2016）[1)]，河野（2016）[2)]は，ESD教育とジオパーク教育との類似性やその教育効果を報告している。この「ジオパーク」（geopark）とは，地球（ジオ）を知り，楽しむことができる場所であり地球科学的意義のあるサイトや景観が保護，教育，持続可能な開発のすべてを含んだ総合的な考え方により管理された１つにまとまったエリアとされている。その役割は，地球活動にともなう自然遺産のジオサイトを「大地の遺産geo-heritage」として保全保護するとともに，教育，啓蒙や研究に活用して，地域の持続可能な発展や振興に寄与するもの

とされている。2011年頃から自治体等を中心として，地方創生や観光を手段とした地域振興に，地域固有の自然環境と文化や人々の暮らしとの関連を地球科学的観点で結ぶ事業「ジオツーリズム」（geo-tourism）に取り組む事例が増加している（渡辺，2011）[3]。

2022年1月時点の国内の状況では，日本ジオパークは46ヶ所で，内9ヶ所は，ユネスコ世界ジオパークに認定されている。南紀熊野地域でも 2014年8月に「南紀熊野ジオパーク」が設立され，現在は，ユネスコ世界ジオパーク認定を目指している。世界ジオパークを推進する世界ジオパークネットワーク（GGN）は，2004年（平成16年）国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）支援により設立され，2015年に正式プログラムになった。現在，46カ国177地域（2022年4月現在）が加盟している。

ジオパークは，認定後も4年に一度の再審査があるため，継続した活動が求められる。再審査の認定基準となる活動も，地質・地層の教育だけではなく，ジオパークの持続可能な地域経営やマーケティングの状況も認定の可否に問われるようになり，ガイドや住民等への教育普及やネットワークを活用した認定地域間の学び合い，商品開発，副教材制作など，再審査に向けた活動の深化がなされている。認定地の教育機関ではジオパークを題材にした教育，研究がされており初等中等教育，高等教育で取り組まれる事例も多いことから，本校の事例も同じ状況下の教育機関に参考になると考えている。

油洞ほか（2016）は，「2014年11月調査で，JGN全会員39地域のうち，アンケートに回答した33地域の58校がジオパーク学習を実施し，6割が授業，4割は部活動であり高校での学習は，野外調査や商品開発が多いが，今後は自然調査と社会参加が組み合わされた総合的な学習が課題」と報告している[4]。

天野ほか（2011）[5] は，茨城大学を例に，ジオパークは学術と地域活性を結びつける事業として，大学の研究成果の学術情報が地域理解，教育，人材育成，案内資料等に貢献し，産官学民金の繋ぎ手を大学が担えると提起している。GNNガイドラインでは，ジオパーク活動の目的として，ジオパークは「社会が直面している重要課題への意識と理解を高めるため，地域のあらゆる自然・文化遺産と関連した地質遺産を活用し，歴史と現代社会における地域の地質遺産の重要性に意識を高めることで，地域の住民が自分たちの地域に誇りを持ち，地域と住民の一体感を強化するもので，地域の地質資源を保護しながらジオツーリズムを通じて新たな収入源を生み出すことや革新的な地元企業，新しい雇用，質の高い研修の機会創出が期待される。」[4] としており，経済活動の活性化を主要戦略に掲げて，活動を通した地域振興を標榜していることが明記されている。

実際に竹之内（2011）は，糸魚川ジオパークを例に，「世界ジオパーク認定を契機として，市民が郷土の自然や文化に対して世界的価値を認識し，かつ誇りを持つようになり，それは認定後のジオパーク活動における市民のエネルギーの源泉になった」と報告している[6]。ジオパーク活動への市民参加は，地域の誇りや主体性を育み，郷土愛の醸成が期待できると考えられる。

同ガイドライン4章教育の項では，「ジオパーク教育（geo-education）は，地球科学の知識と環境・文化の概念を社会に対して伝えることにはじまり地質学の理解およびその環境問題との関わりへの理解促進，科学研究の推進による専門科学者と地域住民の協力関係の構築，地域レベルでの人材能力開発まで，知識，概念の伝達から人々の協力促進，能力育成まで様々な機能を担う」として，地域の人材育成や協力関係の構築も成果としている。

これらの先行事例を汲みながら，本稿の地域学の科目構成に際しては，地学の知識提供に留まらず，その保全と継承のために人文現象と経営の視点も重要と考えて歴史や文化，産業振興，マネジメントを学びの対象に加え，国際社会の動向に応じた持続可能な経済活動に視座を得られるように幅広い研究分野から学際的な構成で実施した。地域学にジオツーリズムの視点を加えることで，大地に育まれた歴史や文化の価値を知り，経営学の視点でその活用を考え，体系的に地域を捉え直すことになり，学習者が生涯学習としての学びを享受するだけではなく，受講後の社会活動に活かすことを期待したためである。

一見ジオパークに関係がなさそうな「食」も，農作物のテロワール，発酵食や食品加工の調理方法，その流通ルートに至るまで地域の地質地形や気象に育まれたものであり，その独自性は地域ブランドとして他の地域が真似できない特性を持つことが多い。「祭」も地質地形と寄り添う地域産業によって信仰の拠り所が異なる。南紀熊野地域でも山や海に向かう祭や，御神体が川，滝，島であり，巨石巨木への信仰は現代も継承されている。「住」も地域の地形で影響を受ける気象や降雨量で住居屋根や建材に地域性がある。

本科目に出講を依頼した教員には，専門分野に加えてジオツーリズムの視点から専門分野と大地との結びつきの解説を依頼した。

これらの学習機会の提供は，ジオパーク認定地の関係者だけで提供できるものではなく，地方国立大学で

蓄積されてきた地域研究の成果や，他大学との学術ネットワークが活用できた。加えて地域経営は，地域毎に課題が違うために一方的な講義での学びの提供では不十分と考えて，科目を補完するために持続可能な地域経営と地域資源の活用を学ぶ塾「南紀熊野観光塾」を別事業で同時期に設置。2020年時点で8期13講座を開催[5]。

さらに，科目開設の授業後に，研究者と双方向に科学の対話が可能なサイエンスカフェ「ジオカフェ」も設置した。2011年頃から2020年3月末で12回開催[6]。

3. 南紀熊野地域の状況

3.1　南紀熊野ジオパーク

南紀熊野地域には，県域の新宮市，白浜町，上富田町，すさみ町，串本町，那智勝浦町，太地町，古座川町，北山村，奈良県十津川村の一部により構成されている「南紀熊野ジオパーク」[7] がある。

県を事務局に，構成市町村や関連組織，有識者で組織される学術部会等で運営されている。和歌山大学も2021年3月に，和歌山県，南紀熊野ジオパーク推進協議会，和歌山大学の3者で，連携協定を締結して教育・研究活動に取り組んでいる。

南紀熊野ジオパークエリアは，南紀熊野サテライトの活動支援組織「和歌山大学南紀熊野サテライト連携協議会」の連携エリアと同じ地域である。

地域でジオツーリズムの教育機会を提供する拠点に南紀熊野サテライトは適地であった。また，当該エリアは，世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」（2004年7月認定）に登録されており，潜在的に有償無償の語り部や地域ガイドが多い地域である。

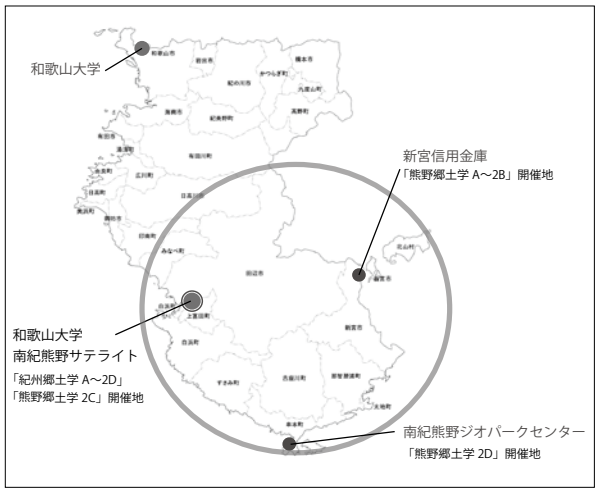


図1　南紀熊野での活動エリアと科目開催地

3.2　和歌山大学南紀熊野サテライト

本科目を実施した「和歌山大学南紀熊野サテライト」は，2005年4月に和歌山県と大学が連携して，高等教育機関が極めて少ない県域の紀南地域の「地域の知の拠点」を標榜して，県と周辺11市町村（田辺市，みなべ町，白浜町，上富田町，すさみ町，串本町，古座川町，太地町，那智勝浦町，新宮市，北山村）他，商工会議所等で構成された連携協議会の支援を受けて「紀南サテライト」として設置された。（2010年7月「南紀熊野サテライト」に名称変更）高等教育機関の少ない地域で，市民講座ではなく質の高い大学の正規科目を開講することにより，大学の専門知や研究成果を地域還元している。大学から100㎞離れた県の施設内に所在し，東京から直通便が往来する南紀白浜空港から約20分の立地である。日本三古湯の白浜温泉が隣町で，大型の宿泊施設が豊富なことから学会や研究会の会場でも利用されている。本学は，空港を管理する南紀白浜エアポート株式会社と地域の人材育成を目的に包括連携を締結。観光塾等を共催している。サテライトでの高等教育の提供は，和歌山県，周辺市町村等が連携した和歌山大学南紀熊野サテライト連携協議会からの寄付金を財源に教員の出張費や研究費が拠出され，手厚い経済的支援や事業立案，広報等の支援を受けて運営されている。設置より17年間，地域の社会人を対象にリカレント教育を継続実施している。

和歌山大学は，南紀熊野サテライトで2つの制度で高等教育の正規科目を提供している。

1つ目は，経済学研究科の開講科目を科目等履修生の制度。2つ目は，教養科目（2020年度より連携展開科目）を，社会人が聴講できる学部開放科目の制度である。本稿の科目は後者で，郷土学のほかに，哲学や法律学，心理学，統計学，経営学や防災など幅広い分野で，年間12～14科目を開設。前期，後期の2期に分けて社会人受講生を募集。自治体や企業からの寄付金を財源に資格取得可能な寄付講座を自治体等と協働実施することもある。授業形態は，本学教員が現地で対面授業を実施。社会人が働きながら受講できるように週末土曜13時～17時，全6回実施。定員は，各科目30名程度。受講対象は，社会人，和歌山大学生，県教育委員会との連携事業「高校生への大学授業公開制度」[8] を利用する県立高校の生徒である。この制度は，県立高校の生徒が高校に在籍しながら本校の大学講義を受講できる制度である。授業は，大学生，高校生，社会人が同じ教室で受講している。このように，南紀熊野サテライトでは，設置時から地域の多様な年代層が学べる制度設計がされており，大学生，社会人，高校

生，研究者が活動を通して共に学び合うことができる場であり，学校教育，社会教育などあらゆる学習層，年齢層が大学教育を享受できる「地域に開かれた学びの拠点」である。サテライトでは，科目提供以外にも各種講座や現地調査，経営塾，サイエンスカフェなど多様な時間や形態の事業展開をしているほか，教員や学生の教育，研究の現地支援や，教育，研究の成果を現地報告会や展示，講座化して地域還元する拠点である。本稿の「紀州郷土学A～2D」及び，「熊野郷土学2C」の会場は，南紀熊野サテライト所在施設の和歌山県立情報交流センターBig.u[9]。「熊野郷土学A～2B」会場は，金融機関の新宮信用金庫の会議室を社会貢献の一環で提供いただいた。「熊野郷土学2D」は，オンライン併設可能な南紀熊野ジオパークセンターで実施した。本稿の科目開催地は，図1の通り。

3.3　学内ジオツーリズム研究会

和歌山大学では，地学教員を中心に，地質巡検等は以前より実施していたが，ジオツーリズムを題材に教育・研究が開始されたのは，2011年に学内競争的資金の地域創造支援機構独創的研究支援プロジェクトが設けられ，研究事業案が学内公募されたことが契機になっている。当時，教育学部地学教員久富邦彦，此松昌彦，観光学部中串孝志，南紀熊野サテライト古久保（筆者）が，県内外の調査と紀南地域のジオツーリズムの可能性を検証するため「和歌山県におけるジオツーリズム自然教育価値創造事業」を提案し，採択された。

事業では，自治体職員や観光事業者等と共に地域研究会を設置。先進地調査では，糸魚川ジオパークの教育普及活動，山陰海岸ジオパークの広域連携の事例等を調査し，その後の県内巡検の成果を含めて報告書に纏められた。住民向けには2012年12月に県立情報交流センターBig.uにて，ジオツーリズムシンポジウムを実施。ジオツーリズムをテーマにしたシンポジウムは県内初であり，地域住民や関係者約100名が参加した。演題は「和歌山ジオツーリズム元年～地球を感じる新しい観光～」として和歌山県の潜在的な資源の活用を促進して地域での新たな広域連携の機会にとジオツーリズムによる地域振興を提案した。研究会では，南紀熊野ジオパーク設置に合わせて，サテライトのある南紀熊野地域での新たな教育活動を検討しており，学びの機運を高めるため同日サイエンスカフェ「ジオカフェ」を実施した。

このように，和歌山大学では，南紀熊野地域にジオパークが設置される以前の準備段階からジオツーリズムによる教育，研究，社会貢献を実施してきた。

4. 科目設置の経緯と概要

4.1　科目設置の背景

科目が設置された背景は，以下3点である。

1点目は，当時2011年3月の東日本大震災，同年9月の紀伊半島豪雨災害の被災直後であり，住民の間で被災地域での継続した生活や，経済活動に不安が大きくなっていたことが挙げられる。

南紀熊野地域の発災直後は，河川氾濫や生活道路の寸断，斜面崩落などの地盤災害も多発しており，自分達が暮らす地域の地形や地盤を学び直したい要望や災害復興策の期待として，新しい観光振興の案が模索されていた時期であった。

2点目は，2013年に学内の教養改革があり，合わせて南紀熊野サテライトの授業を改編する時期であった。教養科目カテゴリーに新設された「わかやま学」に位置付ける形で，2年間の体系立てた学びに構成する科目内容を模索していた時期であった。

3点目は，県に「南紀熊野ジオパーク」設立準備が始まり，ジオパークや地域学，地域資源の利活用に関する学習ニーズが高まっていた時期である。

事務局でもジオガイド認定講座を別途開始した時期でもあり，同協議会の広報協力を受けて本科目にも関心が集まった。ジオパークや大地の成り立ちと，その活用を学ぶ科目として開設した初年度は，ジオパークの設置を間際にした制度設計側の県自然環境室（現在ジオパーク室）職員方や自治体職員，環境省職員，高校教諭，ガイド，ジオパークに関心を持つ住民等が受講。定員を超える受講者を得たことからも伺える。このような背景から，ジオパークを活用した防災教育やジオツーリズムでの観光振興に対しての学習意欲が高まっていた時期であり，地域社会の求めに応じた設置の背景とタイミングであった。

4.2　科目概要

科目内容は，ジオパーク教育を扱うが，科目名に「ジオ」と記載せず「郷土学」として，紀伊半島に特化した地域学に構成した。科目の代表教員は，研究会から此松が務め，担当教員として久富，中串，古久保が構成を検討しながら必要な講義を学内外の教員等に依頼した。複数教員で担当するオムニバス形式にしたことで，教員の出張負担を軽減できたことや，土曜午後1日の出講依頼のため，幅広い教員の協力が得られた。2013年前期「紀州郷土学A」を皮切りに，後期に「紀州郷土学B」を，翌年2014年前期「紀州郷土学C」，後期「紀州郷土学D」と，4科目を2年間で開講した。続編の希望があり，2017年後期まで「紀州郷土学2A～

2D」計８科目を西牟婁地域で実施。翌年，東牟婁地域での高等教育機会の設置を望む声を受けて，紀州郷土学を参考に熊野地域での研究成果から2018年前期～2021年後期「熊野郷土学Ａ～Ｄ」，「熊野郷土学2A～2D」８科目を東牟婁地域で実施した。

出講教員数は，延べ137名（本学教員95名，学外ゲスト講師42名）で，幅広い研究分野の教員の協力を得られた。この科目で提供した学問領域は，自然科学，地盤工学，地質学，気象学，天文学，環境学，民族学，農業経済学，史学，日本史，人文地理学，経営学などジオツーリズムの視点から学際的な分野，体系的な構成で提供した。ゲスト講師に全国のジオパーク研究者やガイドを複数招聘したことで視座を広げ，先行地域の課題を知る機会になった。科目内容と講師は，文末表1，２を参照。

4.3　科目内容

科目の内容を例示すると，以下の通りである。

「紀州郷土学Ａ」は，「紀伊半島の生い立ちと自然遺産の活用，地形地質を防災，観光，教育に活かす手法ジオツーリズム」，「地形図，航空写真の判読と地理情報解析から見る紀伊半島」，「地域資源を観光や経済に活用」の３部で構成された。

「紀州郷土学Ｂ」は，「紀伊半島の地形地質の特徴とそれを取りまく自然環境（植物，動物）」，「紀伊半島の歴史と文化として祭り，食文化，移民文化」，「地理，地形から生まれた歴史や祭，民俗学」

「紀州郷土学Ｃ」は，「郷土の保全管理活用，環境倫理，サスティナビリティ，自然信仰，ナショナルトラスト運動，世界遺産と環境保全，自然エネルギー，風土産業，地域経営のあり方」

「紀州郷土学Ｄ」は，「郷土教育，伝承をテーマに地域の伝統的な祭や和歌山県のふるさと教育，紀伊半島の災害史や森づくり，エコロジーと自然環境，環境倫理と民俗知」を扱った。

「紀州郷土学2A」は，自然科学やジオパークに関して学び直しの要望があり，内容と講師を変更して設置。「紀伊半島の生い立ち，紀伊半島の大規模災害とまちづくりの歴史，ジオパーク，サイエンスコミュニケーション，紀伊半島の植生，レッドデータブック，生態系」

「紀州郷土学2B」は，紀伊半島の地形や地理的特徴から継承されてきた民俗と芸能として，「熊野古道の歴史，熊野三山と熊野詣，参詣記，徳川御三家の成立，物語から読み解く熊野参詣の歴史，説話学と南方熊楠，紀伊半島の祭と獅子舞の分布の特徴，文化遺産の保全と活用の歴史」

「紀州郷土学2C」は，紀伊半島の地域産業をテーマに，「紀伊半島の地域産業，和歌山県のウメ産業の今昔，発酵食品と食文化，自然と林産物の利用，和歌山の風土産業，観光産業」

「紀州郷土学2D」は，「地域資源の活用を戦略的視点から顧客の視点，生活と文化，発掘と評価」成果をウェブサイトlocalwikiに記録する実習をした。

「熊野郷土学」では，「天文学，鉱山の歴史，ジオパークネットワーク，エコツーリズム，ダークツーリズム，まちづくり，商店街，情報活用，人口減少とコミュニティ」

「熊野郷土学2」は，「地域の歴史や郷土資源の価値と商品化，インバウンド，地域文化の再評価，地域資源の価値をどう地域経営に活かすか」持続可能な地域活動を学んだ。

5. 受講者属性

5.1　受講者の年齢と居住地

近年に実施した「熊野郷土学」受講者を年代別に見ると図２の通り，2021年に10代～20代の受講が増加した要因は，高校生と大学生にオンライン受講を許可したからである。一方，2020年は，コロナ禍の影響を受けて，他科目と同様に社会人の申請控えが顕著であった。高齢受講者や高齢家族を持つ受講者の感染症罹患の敬遠や，山間部のネット環境不備，オンライン接続の対応が困難なことが理由であった。

「熊野郷土学」受講者の居住地属性を市町村別に見ると図３の通り，会場の近隣市町村が多い。隣接県からの受講もあった。「熊野郷土学」受講総数は253名，「紀州郷土学」は191名，地域学全ての受講登録者数は，444名である。

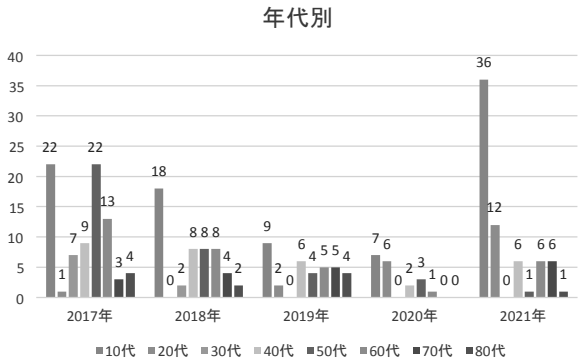
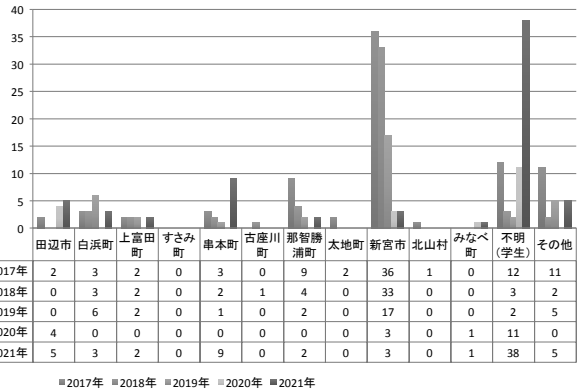


図２　年代別受講者推移「熊野郷土学Ａ～2D」



	田辺市	白浜町	上富田町	すさみ町	串本町	古座川町	那智勝浦町	太地町	新宮市	北山村	みなべ町	不明（学生）	その他
2017年	2	3	2	0	3	0	9	2	36	1	0	12	11
2018年	0	3	2	0	2	1	4	0	33	0	0	3	2
2019年	0	6	2	0	1	0	2	0	17	0	0	2	5
2020年	4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	11	0
2021年	5	3	2	0	9	0	2	0	3	0	1	38	5

図３　受講者の居住地属性「熊野郷土学Ａ～2D」

5.2　制度設計側の参加

特筆事項は，県職員，自治体職員等のジオパーク制度設計側が積極的に受講していた点である。数値を資料から抽出すると，16科目に述べ29名受講。図４の通りである。A，2Aはジオパークや自然科学を取り扱った内容が多いため制度設計側の受講が多い傾向。南紀熊野サテライトの科目は，興味関心に合わせて１科目毎に受講できるのも特徴的である。

5.3　高校生の大学授業公開制度

「熊野郷土学」では，「大学授業の公開制度」を利用する高校生61名が受講。参加数は図５の通り。通学圏外の高校側より要望があり2020年のコロナ禍はオンライン受講も可とした。高校生は会場が通学圏内か否かが参加数に影響を与えている。初年度の授業後アンケートでは，和歌山大学進学を視野に受講する高校３年生が多い傾向であった。

5.4　大学生への教育効果

和歌山大学ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）を以下に挙げる。卒業する全ての学生がこの５つの要素に関わる能力を身につけているとしている。

1. 幅広い教養と分野横断的な学力
2. 専門的知識や技能
3. 課題解決力と自己学修能力
4. 協働性とコミュニケーション能力
5. 地域への関心と国際的視点

本稿の科目から学生への教育効果が期待できる点は，ジオツーリズムを題材にESD教育が取り入れられ国際的視点や汎用力のある学生の育成に基礎的な学習が可能な点である。ジオパーク教育による大学での学術研究の推進，地域との関係構築は，大学の教育，研究活動だけではなく，認定地域側の活動推進にも重要であり，地域と大学の双方に相乗効果が期待できる活動である。学生の教育効果の検証は，学生にアンケート調査等が必要であるが，本稿報告までに実施が出来なかったため，積み残した課題である。今後も大学の目指す育成像と世界的な動向，現代的課題を取り入れた科目の開講が望まれる。

年度	期	科目名	所属	計
2013(平成25年)	前期	「紀州郷土学A」	県職員3(自然環境室)	3
	後期	「紀州郷土学B」	―	―
2014(平成26年)	前期	「紀州郷土学C」	―	―
	後期	「紀州郷土学D」	―	―
2015(平成27年)	前期	「紀州郷土学2A」	県職員4	4
	後期	「紀州郷土学2B」		
2016(平成28年)	前期	「紀州郷土学2C」	―	―
	後期	「紀州郷土学2D」	県職員1,高校教諭1	2
2017(平成29年)	前期	「熊野郷土学A」	市職員4,県職員3,環境省1	8
	後期	「熊野郷土学B」	―	―
2018(平成30年)	前期	「熊野郷土学C」	県職員1,市職員1	3
	後期	「熊野郷土学D」	―	―
2019(令和元年)	前期	「熊野郷土学2A」	市職員2,県職員1	3
	後期	「熊野郷土学2B」	市職員1	1
2020(令和2年)	―	―	―	―
	後期	「熊野郷土学2C」	県職員1、公務員1	2
2021(令和3年)	―	―	―	―
	後期	「熊野郷土学2D」	市職員1、高校教諭1、公務員1	3
				29

図４　制度設計側の受講生数

【熊野郷土学A～2D　高校別受講数　2017年～2021年】

開講年	東牟婁会場	近大附属新宮高校	県立新宮高校	県立串本古座高校	受講数
2017年	熊野郷土学A	10	7	0	17
	熊野郷土学B	4	1	0	5
2018年	熊野郷土学C	3	14	0	17
	熊野郷土学D	1	0	0	1
2019年	熊野郷土学2A	9	0	0	9
	熊野郷土学2B	0	0	0	0
2020年	熊野郷土学2C	0	2	0	2
2021年	熊野郷土学2D	0	4	6	10
計		27	28	6	61

2021年 新宮高校は当年オンライン受講のみ希望
対象期間の他科目では、神島高校、南部高校、日高高校の受講あり

図５　2017年～2021年の高校生受講者数

6. 今後の可能性

6.1　リカレント教育

内閣府による「平成30年度生涯学習に関する世論調査」[10] によれば，社会人が大学などで学び直しをするために必要な支援の第１位は「学費の負担などに対する経済的支援」(42.5%)，第２位は「土日祝日や夜間など開講時間の配慮」36.0%である。経済的負担と時間が学びの阻害要因となり，学び直し拡大のボトルネックになっているとされている。

大学が提供する学習機会は，長期履修だけでなくミニプログラムや隙間時間に学べる機会提供が必要である。地域住民の生活圏内にある大学サテライトでは，社会人や高校生が気軽に大学の高等教育を享受する機会を得ている。今後のリカレント教育への期待としては，文部科学省が進める産学連携による高度人材育成などと併行して，就業人が日常生活の中で大学の高等教育に触れて学べる機会の提案や大学を幅広い世代に解放

する柔軟な設定も必要である。オンライン教育も単位認定を必要としない高校生や就業者が利用目的を分けて部分的に活用して大学の教育機会に触れられるため，距離的な教育機会格差が大きい地域で役立つリカレント教育の有効な手段である。同調査では，学費の家庭負担が大きいことも挙げられている。南紀熊野サテライトの科目「世界農業遺産」では，所定の修了要件を満たした際に，大学が発行する修了証を関連の協議会に提示して「梅システムマイスター」に登録すれば，協議会から受講費用を全額助成される制度を備えた科目もある。

地域側が事業運営のために必要な人材育成に関しては，住民の学習意欲や熱意だけに依存する認定制度でなく，受講者への直接的な学費助成と大学への教育研究費支援や講座運営の事務局機能支援も併せると具体化しやすい。年齢層や活動フェーズに合う学習プログラムの設計を適切に行い，必要な人材育成をすることは，確実な成果の到達に重要である。

南紀熊野でのリカレント教育の成果では，ジオツーリズムを題材に食と温泉や散策でのリラクゼーションをテーマに女子旅の観光商品を企画したり，地域資源を商品化して起業した例や，受講生らが受講後に自主的に県の助成制度に申請して教員を招聘して県内のジオサイトをバスで巡る事業や，受講生が自らの地域に郷土史家を招き，ご当地郷土学シリーズを主催するなど，各地で後進に伝える知識の循環が始まっている。地域の独自性と価値を学び直すことで，愛着や学習意欲の向上，地域活動に関心を持つ機運が醸成されている。

6.2　多様な主体者形成，主体者意識の向上

本稿の郷土学シリーズは，ふるさと教育として生まれた場所への愛着の醸成を目指したのではなく，シビックプライドの提起に近しい。シビックプライドとは「住んでいる地域に誇りを持ち，権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味があるとされ，自分自身が関わって地域を良くしていこうという当事者意識に基づく自負心が内包されている」と（牧瀬，2019）[7] が纏めたように，ジオパークの活動は，移住者も含めた「住民」が権利と義務，誇りを持って関与できる活動ベースである。

南紀熊野地域でも，移住者であるガイドやインストラクター，研究者等がジオパーク活動の主体者となっている。地元に貢献して地域をより良い場所にするために自身が関わっているという当事者意識や自負心を醸成することは，ジオパークに留まらず，地域への愛着や主体性を育み，健全なコミュニティを再形成している。

6.2　次世代への継承，知識の循環

科目では，将来世代が情報を活用できるように，地域情報をウェブサイトlocalwikiにデジタルアーカイブスする実習を取り入れた。授業での入力手法の習得が誘引となり，地域情報の投稿数や登録市町村域が拡大して授業後も活用されている。情報伝達手法の具体的な習得機会は重要である。また，地域経営の学習に関しては，先行事例や手段手法の提供ではなく「地域ならでは」の価値を知り，その活かし方を学習した。

課題へのアプローチも視点を変えれば長所となることも学習した。広域な紀伊半島で観光商品を検討する際に二次交通が課題であったが，サイクルツーリズムやウェルネスツーリズムなど，広域で移動を楽しむ観光商品の提案がされている。地域活動に取り組む住民団体や企業，自治体，関連組織からなる広域のプラットホームが構築されて主催者同士のネットワークで自治体区域を超えた新たな価値を生み出している。ほかにも地域には多様なプラットホームが存在する。世界遺産や日本歴史遺産，世界農業遺産などである。世界農業遺産では，受講した社会人が大学生の演習受入や，副教材を作成して認定地の中学生を対象に講話するなど，後進育成をしている。受講後も学修者を継続支援することで緩やかな学修者同士の連携が生まれている。

今後も地域の学習拠点である南紀熊野サテライトでは，各分野のプラットホームの主体者を繋ぎ，相互に交流して学び合うステーションの役割を担うであろう。持続可能な地域経営を目指すうえで，各分野での多様な主体者育成は，大学が地域でできる有意義な社会貢献である。

6.3　提起，地域課題克服と今後に向けて

本稿で扱った事例から，地域課題の克服に向けて考えられることを，以下3点について述べる。

1点目は，学修者が科学コミュニケーターとして大学や研究者への情報提供者になると考えられる。地質特性を学んだ受講生は，普段からガイドをしながら観光地の地質や斜面を観察しており，斜面崩落や遊歩道等の経年の変化にも気付きやすく地域の減災に役立っている。大地の変化を見守る目が増えることは，高等教育機関の少ない地域での持続可能な災害レジリエンス力を高めるうえで重要である。

2点目は，シビックプライドの醸成から人口流出減へ期待が高まることである。特に18歳人口の流出が課題であるが，地域学受講後の高校生アンケートの結果では「祖母の地域活動には全く興味がなかったが，受講してみて地域の素晴らしさを認識できた。教える教

員になって地元の子供達に伝えたい」との記載があった。地域で学んだ高校生や社会人がその後，和歌山大学へ入学している事例もある。

３点目は，制度設計側においても学び直しのニーズが存在することである。制度を作る側と現場で活動する側が共に学ぶことで，双方の思惑のギャップや活動を補完し合う知見が得られる。共通認識の構成や運営上の課題に気が付きやすい点もある。制度設計側が提供だけに終始せず，自らも住民や活動者と共に学び続ける柔軟な姿勢と理解があることは重要である。今後さらに，地域全体へのジオパーク教育の普及には，将来世代の学校教育，現役世代の社会教育の両方への普及が必要である。学校教育への接続は，現場のことを良く知り教育支援ができる人材が必要である。連携は組織だけでは機能しない。繋ぐ人が重要な役割を担う。そのためジオパークのように幅広い活動が必要な事業では，全てを事務局が負うのは不可能であろう。行政が推進する場合には，縦割になりがちではあるが，企画部門，環境部門，観光商工部門，教育委員会など，各部門で既に地域との繋がりを持つ組織を活用して，連携に必要な人員が集まって事業を進めることができれば飛躍的に普及推進の活動が進むと考えられる。

本稿の科目構成の課題としては２点あり，１点目は，１科目毎に受講が出来るために科目立案側が体系立てた構成にしても受講者の興味関心によって，学習内容が偏ることである。一定の効果が得られるように，受講推奨のコース体系の提案が必要である。また，全体を復習できるように，テキスト化や書籍化しておくのも良い手法ではないかと考えている。２点目は，地質地形などの大地の生い立ちを最初に，後に動植物や地域の産業や歴史文化の学習をしたが，ともすれば馴染みのない地質名や地層の性質を学ばなければ理解が進まないのならジオパークは取っ付きにくいし，縁のないものと捉えられる可能性がある。今後に地域学を開講する機会があれば，地域の生業や暮らしを先に学び，学習が進むにつれて生業，暮らしや文化は，地域特有の大地（地質，地形）により育まれた気象，風土に由来して形成されることや多様性が集まって地球上の多様な文化や暮らしを生み出していることに辿り着くような逆の視点から地域学を提案したい。

地域の文化は，他の地域が真似できない大地からの贈り物である。また，大学は知の提供だけではなく，日々変化する地域を題材にプレーヤーとして共に活動をしながら後世に残す知見を整理して継ぐ役割を担っている。大学は今後も，地域社会とのネットワーク構築や専門知を活用した地域振興への参画が求められるであろう。ジオパークを通した教育活動は，ユネスコ世界ジオパーク認定がゴールではなく，それを維持継続していく過程で必要となる保全，活用，教育，経済活動の考え方の変化への対応の模索であり，今後も国際社会の一員である認識を深めてくれるものである。様々な機会で大学での豊かな学びを享受する社会人や生徒が増加することが望まれる。

7. まとめ

本稿では，和歌山大学が，南紀熊野サテライトにおいて市民を対象に高等教育を提供している例に，ジオパーク教育や地域学の事例を報告し，社会貢献で見込まれる可能性を各項で考察した。さらにこれらの貢献度を増すためには，(1)多様な主体者形成には，各プラットホーム間の連携推進。(2)知の循環と継承には，受講者への学習費用の助成と，学修後の活躍機会や情報提供。(3)地域振興には，地域資源の活用での地域内経済循環の推進と国際的視点で社会教育の学習機会を今後も継続することが必要と考えられる。

現在，南紀熊野ジオパーク推進協議会は，ユネスコ世界ジオパーク認定を目指して，2022年４月に，日本ジオパーク委員会に国内推薦の申請をしている。ジオパークの活動には多様な組織間のネットワークやパートナーシップが問われるため，ジオパークを通じた教育や持続可能な開発のためのプログラム，マネジメントには，大学の他にも企業や各種団体などが今後も参画して多様な組織間のネットワークによって，地域での新たな取り組みが深められるであろう。後考を俟ちたい。

8. 謝辞

和歌山大学南紀熊野サテライトでの授業科目の開講は，和歌山大学連携協議会の寄附金に依っている。科目開講に際して，地域の皆様，会場を提供いただいた皆様，講師各位には多大なるご協力とご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

1) 竹之内耕 (2016)：ジオパークの視点を導入した学校教育と社会教育の進展―糸魚川ユネスコ世界ジオパークを例に―地学雑誌，125 (6)，795–812. [Takenouchi, K. (2016): Progress of School and Social Education Implementation of Geoparks in the Itoigawa UNESCO GlobalGeopark (CigakuZasshi), 125 (6), 795–812. (in Japanese with English abstract)]

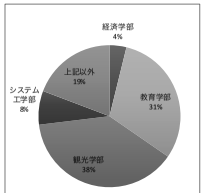
2) 河本大地（2016）：ESD（持続可能な開発のための教育）とジオパークの教育．地学雑誌, 125 (6), 893–909. [Kohmoto, D. (2016): ESD (Education for Sustainable Development) and Education on Geoparks (Chigaku Zasshi), 125, 893–909. (in Japanese with English abstract)]
3) 渡辺真人 (2011)：世界ジオパークネットワークと日本のジオパーク．地学雑誌．120, 733–742. [Watanabe, M. (2011): Global Geoparks Network and geoparks in Japan.jounal of Geography (Chigaku Zasshi) 120, 733–742. (in Japanese with English abstract)]
4) 油洞一央・山下聖・高橋冴（2016）：室戸高校における地学的視点を取り入れたジオパーク教育．地学雑誌, 125 (6), 813–829. [Kazuhiro, Y.Sei, Y.andSae, T. (2016): Geopark Education Adopts a Geographical Viewpoint at Muroto Senior High School (Chigaku Zasshi), 125(6), 813–829. (in Japanese with English abstract)]
5) 天野一男・松原典孝・細井淳・本田尚正・小峯真司・伊藤太久（2011）：茨城県北ジオパーク構想での茨城大学の活動—ジオパーク推進における大学の活動例—地学雑誌．120, 786–802. [Kazuo, A.Noritaka, M. Jun, H.Naomasa, H.Shinji, K.Taku, I.(2011): Regional development in Itoigawa Geopark.journal of Geography (Chigaku Zasshi), 120, 786–802. (in Japanese with English abstract)]
6) 竹之内耕 (2011)：糸魚川ジオパークと地域振興．地学雑誌, 120, 819–833. [Takenouchi, K.(2011): Regional development in Itoigawa Geopark.journal of Geography (Chigaku Zasshi), 120, 819–833. (in Japanese with English abstract)]
7) 牧瀬稔「日本における「シビックプライド」の動向整理」法政大学公共政策研究科『公共政策志林』巻7 13–26頁　2019年

注

[1] 文部科学省HP中央教育審議会大学分科会制度部会 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1412878.htm
[2] 南紀熊野サテライト https://www.wakayama-u.ac.jp/kii-plus/nanki-kumano/
[3] 持続可能な開発のための教育（ESD）https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm
[4] GNN世界ジオパークネットワークガイドラインhttp://www.unesco.org/new/en/natural-sciences/environment/earth-sciences/global-geoparks/proposal-submission/
[5] 古久保綾子・出口竜也「和歌山大学におけるリカレント教育の現状と課題」和歌山大学観光学会『観光学』第25号　91–104頁　2021年
[6] 古久保綾子・中串孝志「ジオカフェ研究者と住民をつなぐ科学コミュニケーション活動を通じた地域貢献の可能性」和歌山大学観光学会『観光学』第23号　85–93　2020年
[7] 南紀熊野ジオパーク　https://nankikumanogeo.jp/
[8] 和歌山県立情報交流センターBigu　http://www.big-u.jp/
[9] 高校生を対象とした大学授業の公開制度　https://www.wakayama-u.ac.jp/scenter/class/koudai/back/koudai_R3.html
[10] 「平成30年度生涯学習に関する世論調査」(内閣府) https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/2-2.html　2022年5月閲覧

表１ （左側）「紀州郷土学Ａ～２Ｄ」担当教員と科目の内容

		授業日	時間	学部	教員名	授業タイトル	ゲスト講師(敬称略)
	紀州郷土学A	*第1部(紀伊半島の生い立ち-自然遺産の活用)/地質地形を防災・観光・教育に活かす手法「ジオツーリズム」紹介*					
1		①平成25年 4月13日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	ガイダンス・総論	
2		②平成25年 4月20日(土)	13:00-17:00	教育学部	久富昌彦	紀伊半島の生い立ち	
3		③平成25年 5月11日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	紀伊半島の気象とジオツーリズム	古川昭之 *1 当時の所属は表下に記載
4		④平成25年 6月 8日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	ジオパーク	溝渕聡 *2 松原典孝 *3
		第2部(地形図・空中写真の判読と地理情報解析からみる紀伊半島)/地形図からの紀伊半島の生活環境を読み取る					
5		⑤平成25年 7月 6日(土)	システム工学部	原 裕二		地形図・空中写真の判読と地理情報解析からみる紀伊半島	
		第3部(地域資源を活用した取り組み/地域資源を観光や経済に活用する取組みを知る					
6		⑥平成25年 7月20日(土)	13:00-17:00	観光学部 教育学部	出口竜也 此松昌彦	地域資源を活用した取り組みについて	此松武彦 *4
		第1部(紀伊半島の自然環境/紀伊半島の地形地質の特徴とそれを取り巻く自然環境(植物・動物の特徴))					
7		①平成25年10月 5日(土)	13:00-17:00	教育学部	高須秀樹	紀伊半島の植物の特徴	
8		②平成25年10月12日(土)	13:00-17:00	教育学部	古賀徹恵	紀伊半島の海辺の生き物(前半)	
		〃	〃	北海道大学 和歌山研究林	楠瀬直樹	紀伊半島のけものたち(後半)	
		第2部(紀伊半島の歴史と文化)(祭り・食文化・移民文化) 紀伊半島の日本史・紀伊半島の祭りを知る(地域・地形からみられた歴史・祭・民俗学)					
9		③平成25年10月26日(土)	非常勤講師	小山健城	和歌山の歴史 ―熊野三山と高野山―		
10		④平成25年11月 2日(土)	13:00-17:00	紀州研	吉村昭輝	紀伊半島の「祭」分布と特徴	
		第3部(紀伊半島の移民文化・紀伊半島の食文化を知る/地理・地形から生まれた移民文化・食文化					
11		⑤平成25年11月16日(土)	13:00-17:00	観光学部	東 悦子	海を渡った人々 ―和歌山の風土と移民―	
12		⑥平成25年11月30日(土)	13:00-17:00	経済学部	鈴木裕範	食文化からみる紀伊半島	
	紀州郷土学C	*郷土の神々、祭礼、法律*					
13		①平成26年 6月 7日(土)	13:00-17:00	観光学部	加藤久美	環境倫理、サステナビリティ、自然信仰	
14		②平成26年 6月14日(土)	13:00-17:00	教育学部	今村隆男	ナショナル・トラス運動―イギリス湖水地方から天神崎へ	
15		③平成26年 6月21日(土)	13:00-17:00	観光学部	永瀬節治	世界遺産と景観保全	
16		④平成26年 6月28日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	中村太和	自然エネルギーの宝庫・紀伊半島	
17		⑤平成26年 7月 5日(土)	13:00-17:00	観光学部	藤田和史	紀伊半島の風土産業	
18		⑥平成26年 7月12日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	これからの地域経営のあり方	
	紀州郷土学D	*郷土教育・伝承*					
19		①平成26年12月 6日(土)	13:00-17:00	教育学部	海津一朗	印南町の雑賀踊りを考える	
20		②平成26年12月13日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	長谷正紀	和歌山のふるさと教育	
21		③平成26年12月20日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	紀伊半島の災害史	
22		④平成26年 1月10日(土)	13:00-17:00	観光学部	大浦由美	紀伊半島の森づくり	
23		⑤平成26年 1月24日(土)	13:00-17:00	システム工学部	中島敦司	エコロジーと自然環境	
24		⑥平成26年 1月31日(土)	13:00-17:00	観光学部	加藤久美	環境倫理と民俗知	



紀州郷土学　教員構成

経済学部	1
教育学部	8
観光学部	10　学内22
システム工学部	2
上記以外	5
外部ゲスト講師	4　学外4

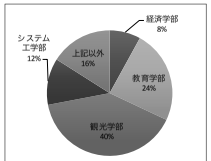
no		授業日	時間	学部	教員名	授業タイトル	ゲスト講師
	紀州郷土学２A	*紀伊半島の大地と自然に学ぶ/紀伊半島の生い立ちと自然遺産の活用*					
1		①平成27年 5月16日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	ガイダンス・総論	中川和之 *5
2		②平成27年 5月30日(土)	13:00-17:00	教育学部	久富昌彦	紀伊半島の生い立ち	
3		③平成27年 6月 6日(土)	13:00-17:00	観光学部	此松昌彦	紀伊半島の大規模災害と まちづくりの歴史	本堀智貴 *6
4		④平成27年 6月13日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	ジオパークのほんとう	柚岡一矢 *7
5		⑤平成27年 6月20日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	サイエンスコミュニケーション?お客様が本当に聞きたいことは?	大西将徳 *8
6		⑥平成27年 6月27日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	高須秀樹	紀伊半島の植生・レッドデータブックから生態系を考える	
	紀州郷土学２B	*紀伊半島の歴史、民俗 紀伊半島の地形や地理的特徴(一より地域で育まれた歴史と地域に継承される民俗や芸能(祭り)や祭り)を紹介*					
7		①平成27年12月 5日(土)	13:00-17:00	教育学部	大槻直義	熊野古道の歴史 熊野三山と熊野詣, 参詣記	
8		②平成27年12月12日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	小山健城	徳川御三家の成立と付家老安藤・水野両家の支配	
9		③平成27年12月19日(土)	13:00-17:00	教育学部	海津一朗	小栗判官物語から読み解く熊野参詣の歴史	
10		④平成27年12月26日(土)	13:00-17:00	教育学部	大槻直義	説話学と南方熊楠	
11		⑤平成28年 1月23日(土)	13:00-17:00	紀州研	吉村昭輝	紀伊半島の祭り, 獅子舞の分布と特徴	
12		⑥平成28年 1月30日(土)	13:00-17:00	観光学部	永瀬節治	地域が育んだ文化遺産の保全と活用	
	紀州郷土学２C	*紀伊半島の地域産業を学ぶ*					
13		①平成28年 5月14日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	ガイダンス・総論 紀伊半島の地域産業	
14		②平成28年 5月21日(土)	13:00-17:00	経済学部	大西敏夫	和歌山県ウメ産業の今昔	
15		③平成28年 5月28日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	鈴木裕範	紀伊半島の発酵食品、発酵の文化経済化	
16		④平成28年 6月11日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	紀伊半島の自然と林産物の利用	高須秀樹 *9
17		⑤平成28年 6月18日(土)	13:00-17:00	経済学部	藤田和史	和歌山の風土産業と可能性を探る	
18		⑥平成28年 6月25日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	紀伊半島の観光産業	
	紀州郷土学２D	*紀伊半島の地域産業を学ぶ*					
19		①平成28年10月 1日(土)	13:00-17:00	観光学部	竹林浩志	地域資源の活用1 戦略的視点から(地域資源の活用法について多面的に学ぶ)	
20		②平成28年10月 8日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	地域資源の活用2 顧客の視点から(地域資源の魅力と可能性評価, 売る仕組みを学ぶ)	
21		③平成28年10月15日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	地域資源の活用3 生活と文化(その商品化による活用の重要性を学ぶ)	
22		④平成28年11月26日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也 竹林浩志	地域資源の発掘と評価1 「地域の魅力をデジタルデータで(地域資源を)保存し世界に発信する」	杉山幹夫 *10
23		⑤平成28年11月27日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也 竹林浩志	地域資源の発掘と評価2 「いままで学んだ地域資源と地元の思いがより伝わる編集を学ぶ」	杉山幹夫 田中秀幸 *11
24		⑥平成29年 1月28日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也 竹林浩志	地域資源の発掘と評価3 「成果発表:地元の総合力でさらにテーマを追求し二次利用を誘発す	杉山幹夫 田中秀幸

実施当時の講師所属（登場順に記載）

*1：古川邦之 :愛知大学経営学部
*2：深見聡 :長崎大学 水産・環境科学総合研究科環境科学領域　環境科学第人間社会環境学系
*3：松原典孝 :兵庫県立大学 自然・環境科学研究所シオ環境研究部門/山陰海岸ジオパーク推進協議会
*4：此松武彦 :やまとごころ.jp編集長
*5：中川和之 :日本ジオパーク委員会
*6：本堀智貴 :和歌山大防災研究教育センター
*7：柚岡一矢 :都山大学経済学部准教授/Minoo秋吉台ジオパーク推進協議会委員
*8：大西将徳 :神戸大学大学院理学研究科学術研究員/元日本科学未来館科学コミュニケーター
*9：高須秀樹 :和歌山大学教育教授, 和歌山県立自然博物館館長
*10：杉山幹夫 :LocalwiKi JAPAN 編集長/和歌山大学産学連携・研究支援センターアドバイザー
*11：田中秀幸 :東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授 専門：ネットワーク経済論

表２ （右側）「熊野郷土学Ａ～２Ｄ」担当教員と科目の内容

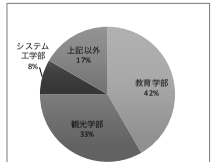
no		授業日	時間	学部	教員名	授業タイトル	ゲスト講師(敬称略)
	熊野郷土学A	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
1		①平成30年6月 3日(土)	13:00-17:00	教育学部	久富昌彦	紀伊半島の生い立ち ―地質と地形―	
2		②平成30年6月24日(土)	13:00-17:00	システム工学部	江種信之	熊野地域の地形地質からの災害史、今後の防災減災を考える	後藤介 *12 当時の所属は表下に記載
3		③平成30年7月 8日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	ジオパーク その実態と課題	新名真津子 *13
4		④平成30年7月29日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	高須秀樹	紀伊半島の自然と林産物の利用	
5		⑤平成30年8月 5日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	地域情報を発信する。ローカルウィキ、OCM地図で街を編集する。	
		〃	〃	観光学部	竹林浩志	地域情報を発信する。ローカルウィキ、OCM地図で街を編集する。(投稿実習)	杉山幹夫
6		⑥平成30年8月26日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	郷土の独自性を持続可能な地域経営につなげるには	山田桂一郎 *14
	熊野郷土学B	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
7		①平成30年10月14日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	ガイダンス・紀伊半島の地域産業	小関洋治 *15
8		②平成30年10月28日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	鈴木裕範	紀伊半島の発酵食品「発酵の文化経済学」	
9		③平成30年11月11日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	徳川御三家の成立と付家老水野家の独立志向と経済政策	小山健城 *16
10		④平成30年12月 2日(土)	13:00-17:00	教育学部	東 悦子	熊野から世界へ ―海を越える熊野―	櫻井敏人 *17
11		⑤平成30年12月16日(土)	13:00-17:00	観光学部	永瀬節治	世界遺産と観光まちづくり:地域に根差した文化遺産の保全と活用	
12		⑥平成31年1月27日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	熊野地域の産業と人口減少、県域を超える持続可能な地域経営を考える	落谷浩介 *18
	熊野郷土学C	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
13		①平成30年6月23日(土)	13:00-17:00	システム工学部	平田隆行	水と住まい、熊野にみる災害文化	
14		②平成30年7月 7日(土)	13:00-17:00	経済学部	長瀬利崇	熊野の鉱山の歴史	
15		③平成30年7月21日(土)	13:00-17:00	システム工学部	中島敦司	自然資源の地産地消による地域の自立	
16		④平成30年7月28日(土)	13:00-17:00	観光学部	中車孝志	国内、世界を結ぶジオパークネットワーク	
17		⑤平成30年8月 4日(土)	13:00-17:00	経済学部	足立基浩	南紀地区 中心市街地の再生 商店街は甦るのか	
18		⑥平成30年8月25日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	エコツーリズムと持続可能な地域づくり	山田桂一郎
	熊野郷土学D	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
19		①平成30年10月 6日(土)	13:00-17:00	観光学部	尾久土正己	暮らしの中の天文学	
20		②平成30年10月27日(土)	13:00-17:00	観光学部	永瀬節治	地域の生活文化資源を活かして観光まちづくり	
21		③平成30年11月24日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	過去から知る災害とこれからのまちづくり 「災害の記憶」の忘却と喚起	落谷浩介 前田正明 *19
22		④平成30年12月 8日(土)	13:00-17:00	図書館	渡部幹雄	MLAKの連携、フィールドミュージアム	
23		⑤平成31年 1月19日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	鈴木裕範	和菓子文化と まちづくり	
24		⑥平成31年 1月 26日(土)	13:00-17:00	観光学部	木川剛志	「現地踏査:地域プロデュース時論(まちなか散策)	谷慎大 *20



熊野郷土学 教員構成

経済学部	2
教育学部	6
観光学部	10　学内25
システム工学部	3
上記以外	4
外部ゲスト講師	12　学外12

		授業日	時間	学部	教員名	授業タイトル	ゲスト講師
	熊野郷土学２A	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
1		①令和元年7月6日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	ガイダンス・大地と暮らす人々、過去から知るエネルギー資源と熊野における民話労働	山口康平 *21
2		②令和元年7月20日(土)	13:00-17:00	教育学部	海津一朗	半島の歴史から見る熊野 ―日本史から見る熊野―	
3		③令和元年7月27日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	福生 淨	世界の海から見る熊野 ―世界史から見る熊野―	
4		④令和元年8月24日(土)	13:00-17:00	教育学部	海津一朗	目で見る熊野の近代史 ―熊野詣と交通網の形成からみる熊野―	中瀬古友夫 *22
5		⑤令和元年8月31日(土)	13:00-17:00	観光学部	小野健吉	史跡・名勝・天然記念物から見る熊野	
6		⑥令和元年9月7日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	半島の利点を活かした持続可能な地域振興	山田桂一郎
	熊野郷土学２B	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 新宮信用金庫)*					
7		①令和元年11月 9日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	人々の暮らしと先人が遺した観光遺産を考える	井出明 *23
8		②令和元年11月16日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	鈴木裕範	川上不白と春川綾 熊野文化と まちづくり	
9		③令和2年1月11日(土)	13:00-17:00	教育学部	海津一朗	熊野の光と影 ―紀伊半島モデルの衝撃―	
10						徐福伝説が紀伊半島にもたらしたもの	塩崎誠 *24
		④令和2年2月1日(土)	13:00-17:00	教育学部	大槻直義	熊野参詣人物史 ―歴史と伝承のあいだ 花山院・平清盛・小栗判官―	
		〃	〃			熊野信仰と弘法大師・小栗判官伝説	小山健城
11		⑤令和2年2月8日(土)	13:00-17:00	観光学部	津田知樹	夏目漱石と大逆事件	恩田雅和 *25
12		⑥令和2年2月15日(土)	13:00-17:00	システム工学部	平田隆行	熊野の民家と西村伊作	
		〃	〃			座学と現地踏査:西村伊作自邸とチャップマン邸の保全改修	下津健太郎 *26
		〃	〃			座学と現地踏査:貴重な建築物の保全活用	足立直哉 *27
	熊野郷土学２C	*郷土学からの地域振興(会場:コロナ禍のためオンライン対応)*					
13		①令和2年6月27日(土)	13:00-17:00	観光学部	竹林浩志	ガイダンス・郷土資源の価値と商品化のとるべき戦略とは?ならでは」の商品と適正な価格とは	横山昌太郎 *28
14		②令和2年7月 4日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	インバウンドと地域コミュニティの入り口として、宿・民泊のこれからのスタイル	此松武彦
15		③令和2年7月18日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	現地調査:南紀熊野ジオパークセンターの見学	福村成哉 *29
16		④令和2年8月 1日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	鈴木裕範	暮らしの視点からの地域文化の再評価と創造	
17		⑤令和2年8月29日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	地域資源の価値をどう地域経営に活かすのか?、Googleマップ情報の活用事例と今後	今井ひろこ *30
18		⑥令和2年9月 5日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	エコツーリズムの視点で見る感じの資源の商品化から地域経営を考える	山田桂一郎
	熊野郷土学２D	*郷土学からの地域振興(会場:東牟婁地域 南紀熊野ジオパークセンター、コロナ禍のためオンライン対応実施)*					
19		①令和3年10月 2日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	ガイダンス・南紀熊野の特徴を考える	
20		②令和3年10月16日(土)	13:00-17:00	システム工学部	江種伸之	2011年の紀伊半島大水害における和歌山県内の土砂災害と河川災害	
21		③令和3年10月30日(土)	13:00-17:00	非常勤講師	森重良太	空港型地方創生 ―南紀白浜空港を起点とした南紀熊野活性化―	
22		④令和3年11月20日(土)	13:00-17:00	教育学部	此松昌彦	観森の資源を活かしたジオパークのソーシャルビジネス	福島大輔 *31
23		⑤令和3年12月1日(土)	13:00-17:00	観光学部	竹林浩志	地域資源を商品化しよう	永山卓也 *32
24		⑥令和4年 1月22日(土)	13:00-17:00	観光学部	出口竜也	熊野地域を持続可能にするために必要なこと	



紀州郷土学２　教員構成

経済学部	2
教育学部	6
観光学部	8　学内24
システム工学部	0
上記以外	4
外部ゲスト講師	10　学外10

熊野郷土学２　教員構成

経済学部	0
教育学部	10
観光学部	8　学内24
システム工学部	2
上記以外	4
外部ゲスト講師	16　学外16

実施当時の講師所属（登場順に記載）

*12：後藤介 :災害科学教育研究センター客員教授
*13：新名真津子 : 公立鳥取環境大学環境学部 准教授/山陰海岸ジオパーク推進協議会学術部会委員/日本ジオパークネットワーク現地審査員/日本地学学会ジオパーク対応委員会委員
*14：山田桂一郎:JTIC SWISS 代表/観光庁観光カリスマ/環境省環境カウンセラー/総務省地域力創造アドバイザー/内閣府官房地活性化伝道師/内閣府官房クールジャパン地域プロデューサー/NPO法人 日本エコ　ツーリズム協会理事/まちづくり観光研究所主席研究員/日本エコウォーク環境資産推進機構委員/和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授/北海道大学観光学高等教育
*15：小関洋治 :元熊歌山県教育委員会教育長
*16：小山健城 :和歌山大学非常勤講師
*17：櫻井敏人 :和歌山県太地町歴史資料室学芸員
*18：落谷浩介 :落谷 浩介：(株)日本総合研究所主席研究員/(株)日本政策投資銀行地域金融部 特任顧問/特定非営利活動法人ComPus地域経営支援ネットワーク理事長
*19：前田正明 :和歌山県立博物館主任学芸員
*20：谷慎大 :関西大学総合情報学部特任教授/和歌山大学観光学部非常勤講師/京都大学変人講座ナビゲーター
*21：山口康平 :和歌山大学教育学部附属中学校 社会科教諭
*22：中瀬古友夫 :郷土史家
*23：井出明 :金沢大学国際基幹教育院 准教授
*24：塩崎誠 :智辯学園和歌山中学・高等学校教諭
*25：恩田雅和 :天満天神繁昌亭支配人
*26：足立直哉 :歌人/コラムニスト/特定非営利活動法人J-heritage 顧問
*27：下津健太郎 : 和歌山県文化財センター文化財建造物課/師
*28：横山昌太郎 :株双地図株式会社 取締役新記号事業部長/森林インストラクター/博士(農学)
*29：福村成哉 :南紀熊野ジオパークセンター研究員
*30：今井ひろこ :コムやポートオフィス
*31：福島大輔 :NPO法人桜島ミュージアム理事長
*32：永山卓也 :Googleマイビジネスプラチナプロダクトエキスパート/GoogleマップGoogle広告プロダクトエキスパート